

小さな橋を,たくさん架けよう

世界各地で自然災害と人間が生み出すいろんな争いが激しくなっています。日本の政治家も1945年の歴史を忘れているようです。戦争は一部の上層階級の権力闘争によって引き起こされる場合が多いようですが、大多数の市民は平和を望み、民間レベルでは名も知れない平和的な協力関係がたくさん築かれています。

小さな橋をたくさん架けて政治家に目を覚ましてもらうことが、とても大切な時期にあると思います。今回はパリ通信から学ぶ日本とフランスの小さな架け橋を渡ってみます。その橋がより大きく強くなるとを願いながら。パリ通信第41号、第54号、第65号、第74号第80号そして今月の第89号を参考にします。

パリ通信の古賀順子さんはパリを訪れる多くの日本人と繋がりを持ち、音楽絵画等の芸術分野のみならず、建築、水資源等の経済活動分野、法律問題等幅広く市民レベルでの日本とフランスの文化交流に貢献されています。美しいフランス語を話され、現地での信頼は抜群です。今回は彼女が深く関わっている（避難船）の歴史を学びます

この避難船を核としてル・コルビュジェ、前川国男、丹下健三、遠藤秀平ら蒼々たる建築家が繋がって行くという建築家の方には常識になっている話です。又、パリを旅する人には興味深い話です。では、本題に入っていきましょう。

1, アジール・フロタン（避難船）とは

パリのセーヌ川、ノートルダム寺院の上流1 km左岸に浮かんでいた船の別名です。本名は当初は「リエージュ号」、途中から「ルイズ・カトリーヌ号」となる。1919年、第一次世界大戦中、パリの物資が極端に不足し、イギリスから英仏海峡を渡って石炭をパリに運ぶ目的で建造された。その



時の名称は戦禍で破壊された町の名前をとり「リエージュ号」となる

1929年、フランスの救世軍が買い取り、宿のない浮浪者、不遇な女性など、恵まれない人々を収容する避難所に改造しようと考え、ル・コルビュジェに設計を依頼、水平で横長の窓が特徴で屋上庭園を備え、160床の収容スペースと食堂を備える船となる。（ル・コルビュジェ船とも呼ばれるようになった）日本からは建築家前川国男が参加した

フランスの救世軍に買取の資金を提供したのが画家マドレーヌ・ジルハルト（1863-1950）であった。彼は生涯の伴侶であった画家ルイズ・カトリーヌ・ブレスロー(1856-1927)から受け継いだ遺産を寄付し、船名が「ルイズ・カトリーヌ号」となった。

この時のマドレーヌ・ジルハルトの言葉は次の通り

「聞いてください。私は画家で、いろいろな人生の苦難に耐えてきました。一度も裕福だったことはなく、そのことで苦しい思いもしました。ですが、今はもう……。最近になって予期せぬ大金を受け取りました。それを「浮浪者」のために使っていただきたい」

1930年から1995年迄救済活動が行われたが老朽化して廃船になる予定であった。

2006年5人の有志がこの船を買い取り修復プロジェクトを立ち上げ、安全基準をクリアし、一般の人を対象にしたマルチ利用型の文化発祥地として、新しい船出をまっていた。修復に際してシェルターのデザインの依頼が日本の遠藤秀平氏になされた。（遠藤氏は前年「パラモダン・マニフェスト」と題する本を古賀順子さんの勤務していた会社から出版した。これが遠藤氏と古賀さんの接点となる）

2008年「ルイズ・カトリーヌ号」は歴史的建造物に登録された。

2009年、遠藤秀平氏はフランスの芸術奨励賞を受賞し、その懸賞金を修復プロジェクトに寄付して再生プロジェクトに参画する。古賀順子さんも参加する。この船の修復は、パリ市のモットー「波に打たれても沈まず」を代表するものとして各界の期待を集め、遠藤秀平氏の参画は日仏に架かる新たな橋としても囑望されはじめた。

2017年日本の公益財団法人国際文化会館が多額の寄付を行い、更に、遠藤秀平氏によるクラウドファンディングにより資金を集め再生の機運が高まった。

2017年8月15日から12月迄、遠藤秀平氏が主催する日本各地で「アジール・フロタン 再生展 -浮かぶ避難所 ル・コルビュジェが見た争乱・難民・抵抗-」と題する展示会が催された。

この時、帰国していた古賀さんと私たち夫婦は神奈川県立音楽堂を訪れ音楽を楽しみ、建物の歴史をうかがい歓談しました。そして古賀さんがアジール・フロタン再生委員会会長のミシェル・カンタル・デュパール氏の本を見せてくれ、邦訳中であることを知りました翌年始めに出版されました。

2018年1月「ル・コルビュジエの浮かぶ建築: 難民避難船への再生に導いた女性たちとその物語」古賀順子訳が出版された。

2018年2月10日ヨーロッパの広域を襲った豪雨のためにセーヌ川が氾濫するまでに増水し「ルイズ・カトリヌ号」が沈没してしまった。河川警備隊と消防隊が必死に沈没をくい止めようと尽力したが失敗に終わった。6ヶ月が過ぎる頃にはこの事故も忘れ去らる危機にあった。

2019年「ルイズ・カトリヌ号」の建造100周年を祝う式典が準備され、日本企業の「アロイ社」から2機の栈橋が寄贈される予定であったが、この沈没によって中止となった

遠藤秀平氏は今月、5月9日、フランスのジュルナル・デ・ザール紙のインタビューに次のように答えている。「これからも修復が完全に終わるまで、このプロジェクトを続けて、国家や政府に頼らなくても重要文化財が守れることの証をする覚悟である。そして、このプロジェクトには古賀順子さんのように女性が力強く助けてくださっている。女性の協力により現在の活動があると認識している」（パリ通信第89号おはら要約）

古賀さん談「

遠藤さんはどんな時にも諦めず、日本の建築家としてアジール・フロッタン船を再生するという強い使命感と義務感を持たれ、アロイ社の栈橋寄贈が生まれ、大きな助成金獲得にもつながっています。本当に凄いとしか言いようがありません」

「水害で延期されていたアロイ社の栈橋寄贈は、日本で制作が始まり、年内には日仏合同の再生プロジェクトの象徴として、大きな橋を架けてくれます。この栈橋が架かることは遠藤さん、プロジェクトを支援してこられた全ての日本の方の思いが実現する記念すべき日になります」（アロイ社の詳細はwww.alloy.co.jpを参照ください）

文字に書いてしまうとこれだけのことかと思われそうですが、この一連の流れの中に登場する人物によって日本の建築界が受けた影響と日本の都市開発への貢献がどれほど大きかったかを思い起こしてみる必要があります。直接関わった3人の略歴を記します。

以下はウキペディアを要約したものです。



2, 前川 國男 (1905-1986)

ル・コルビュジエの門を叩き、モダニズム建築の旗手として、第二次世界大戦後の日本建築界をリードした。丹下健三、木村俊彦は前川事務所の出身である

1928年 (昭和3年) - 東京帝国大学工学部建築学科卒業

パリへ行きル・コルビュジエ事務所に入所。

1930年 (昭和5年) 帰国。東京レーモンド建築事務所に入所。

1935年 (昭和10年) - 銀座に事務所開設するも1945年空襲で焼失。目黒の自邸に事務所機能を移転

1951年 (昭和26年) - 第8回近代建築国際会議大会に、丹下健三、吉阪隆正を連れて参加。

ル・コルビュジエと再会。

1954年 (昭和29年) - 四谷に事務所を建設

1955年 (昭和30年) - ル・コルビュジエ来日、前川事務所訪問。

1959年-1962年 (昭和34-37年) - 日本建築家協会会長。

1968年 (昭和43年) - 第一回日本建築学会賞大賞受賞。受賞者のメッセージとして「もうだまっていられない」を発表し、建築家と建築界における精神の自由と連帯意識の欠如を批判する。その生涯を通し建築家の職能と職業倫理の確立のために尽力した。

1984年 (昭和59年) - 日本建築家協会名誉会員。(昭和61年) - 死去。享年81。

主な設計建物

神奈川県立音楽堂、神奈川県立青少年センター、東京文化会館、東京海上日動ビルディング、紀伊國屋ビルディング他多数

3, ル・コルビュジエ (Le Corbusier¹1887- 1965)

(1)人物

スイスで生まれ、フランスで主に活躍した建築家

フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエと共に「近代建築の三大巨匠」として位置づけられる。

前川国男、丹下健三に影響を与えた人物である

東京の上野公園内にある国立西洋美術館の本館は「ル・コルビュジエの建築作品-近代建築運動への顕著な貢献-」、7カ国17件の構成資産として世界文化遺産に登録されている。7カ国に跨がる一人の作品が群をなして世界遺産になっている特殊な貢献と評価されている

ル・コルビュジエは父の時計職人の道を進む



つもりだったが、視力が非常に弱く、精密な加工を必要とする時計職人としては重大なハンデを背負っていたため、美術を学び後に建築家の道へ進んだ

1911年（24歳）から半年かけてベルリンから東欧、トルコ、ギリシャ、イタリアを巡る東方への旅へ出た。

1914年に鉄筋コンクリートによる住宅建設方法である「ドミノシステム」を発表。

1917年にパリへ行き、2年ほど鉄筋コンクリート会社に勤めた。1922年に、「住宅は住むための機械である」という有名な建築思想の発想をまとめた著書『建築をめざして』を刊行し、世界中の建築家から注目を集めた。

1925年のパリ万国博覧会（アールデコ博）では装飾のない『レスプリ・ヌーヴォー館』を設計し異彩を放った。また1922年のサロンドートンヌでは『300万人の現代都市』を、1925年にはパリ市街を超高層ビルで建て替える都市改造案『ヴォアザン計画』を、そして1930年には『輝く都市』を発表した。これらは低層過密な都市よりも、超高層ビル

ルを建て、周囲に緑地を作ったほうが合理的であるとするもので、パリでは実現しなかったが、以降の都市計画の考え方に影響を与えた。日本への影響は大きかったと言える。



1931年には「新しい建築の5つの要点」（近代建築の5原則とも言われていた）を発表しモデル邸を建築した。5の要点とは①ピロティ、②屋上庭園、③自由な設計図、④水平連続窓、⑤自由なファサードのことを指す。

1932年にソ連で行われたソビエト宮殿のコンペに応募して敗退したものの、その斬新さは注目を浴び、丹下健三が建築家を志すきっかけにもなっている

第二次世界大戦後、かねてよりの主張の実践である「ドミノシステム」に基づく集合住宅『マルセイユのユニテ・ダビタシオン』を建設（1947年-1952年）

後期の代表作『ロンシャンの礼拝堂』（1955年竣工）はカニの甲羅を形どったとされる独特な形態で、シェル構造の採用など鉄筋コンクリートで可能になった自由な造形を示している。ここでは従来主張していた近代建築の指標である機能性・合理性を超える新たな表現に達した。ドミニコ会派のカトリック信者であるル・コルビュジエは、引き続き『ラ・トゥーレット修道院』の設計についても依頼を受けた（1960年竣工）。この間に『国立西洋美術館』の基本設計のため、1955年に一度来日している

1960年には自らの仕事の記録を公的に保管することを構想し、1962年にはフランス文化相のアンドレ・マルローにこれを認めさせた¹

1965年8月27日、南フランスのロクブリュヌ＝カップ＝マルタンで海水浴中に死去した。享年78歳



写真はベルリンのユニテ・ダビタシオ

(2)歴史上の功績は、鉄筋コンクリートを利用し、装飾のない平滑な壁面処理、伝統から切り離された合理性を信条としたモダニズム建築の提唱

者ということになる。ル・コルビュジエの思想は世界中に浸透したが、1920年代の近代主義建築の成立過程において建設技術の進歩にも支えられて、とくに造形上に果たした功績が大きい。彼の造形手法はモダニズムの一つの規範ともなり、世界に広がって1960年代に一つのピークを極めた

(3)ル・コルビュジエの世界遺産群

ル・コルビュジエの建築のうち、ドイツのヴァイセンホーフ・ジードルングの住宅、アルゼンチンのクルチェット邸、ベルギーのギエット邸、フランスのラ・ロッシュ＝ジャンヌ邸、ペサックの集合住宅、サヴォア邸、ナンジェセール・エ・コリ通りのアパート、ユニテ・ダビタシオン、サン・ディエ工場、ロンシャンの礼拝堂、カップ・マルタンの小屋、ラ・トゥーレット修道院、フィルミニのレクリエーション・センター、インドのチャンドーガル、日本の国立西洋美術館、そしてスイスのレマン湖畔の小さな家²およびイムーブル・クラルテの計7か国17件は、2016年にル・コルビュジエの建築作品-近代建築運動への顕著な貢献-として世界遺産に登録された

4、遠藤秀平

1960年滋賀県びわ町（現 長浜市）に生まれる。1986年京都市立芸術大学大学院を修了後、石井修／美建・設計事務所に勤める。その後独立し、1988年遠藤秀平建築研究所を設立。1990年に最初期の作品である3rd FACTORY志野陶石でアンドレア・パラディオ国際建築賞を受賞。

1994年のCyclestation 米原では、主に土木用の材料であるコルゲート鋼板を軽やかに湾曲させて用い、以降の建築でも数多く登場する。1998年のSpringtecture 播磨ではコルゲート鋼板を螺旋状に展開し、内外の境界を緩やかにつなぐ建築を生み出し、世界で最も有名なトイレの一つとして名を馳せている。

近年は2007年のSlowtecture 三木（ブルボンビーンズドーム）における屋根壁面の大規模な緑化、そしてBubbletecture ひょうご（ひょうご環境体験館）では、間伐材を主要構造材とする立体トラス構造の三次元空間など、地球環境と建築の新たな関係性を構築

する提案を行っている。ElectaやCodexなど海外の出版社からの著作や講演も多く、国際的な評価の高い現代建築家の一人である。

遠藤氏の作品は、素材がもつ魅力を最大限に引き出した大胆な造形空間が特徴だ。それは既存の建築とは明らかに異なる独自のスタイルであり、遠藤氏はこれを「パラモダン」と独自の表現をする

直線的な柱と梁による構造や床・壁・天井といった要素を組み立てて構成する既存の建築と、遠藤氏の建築は明確な違いをもつ。建物の内側と外側の境界をなくしたり、大地から連続したような空間構成は、従来にない独自のものであり、一連のコルゲート鋼板による作品に象徴される。

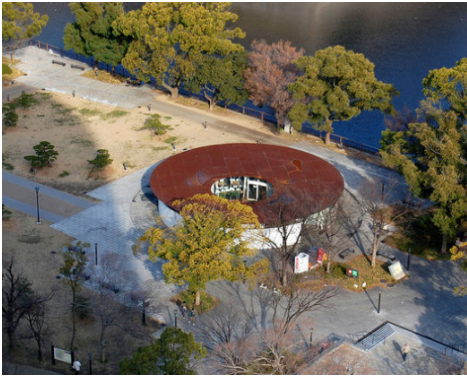
パラモダンの考えを実践したのが「ルーフテクチャー」「スプリングテクチャー」「バブルテクチャー」「グローテクチャー」「スローテクチャー」といった言葉で表現する作品である。直訳すればルーフテクチャーとは屋根状建築、スプリングテクチャーとはバネ状建築、バブルテクチャーとは泡状建築ということになる。アーキテクチャーから派生させた、これもまた遠藤氏による造語である。ここでは3作品を紹介する。

「O-RUSH 天白」は、名古屋市にあるスプリングテクチャー。コルゲート鋼板による建築で、自由度と可変性の高さを備える。遠藤氏はコルゲート鋼板を「薄いけど強いという二面性が魅力」「私にとっては特殊な素材ではない。コンクリート打ち放しと同じ感覚です」と話している。



「米原市立米原幼稚園（滋賀県）」は、木造によるバブルテクチャーである。シングルレイヤーのトラスによるドーム状建築が泡状につくられており、分節されたものではなく連続性のある空間構成となっている。





「Gravitecture 大阪城」は、屋根を柱や梁で支持するのではなく、鋼板を折り曲げたりねじれさせて自立させた作品。遠藤氏によれば「重力を意識した」建築である。

アンビルドテクチャーとは、直訳すると完成していない建築、あるいは完成できない建築という考えを持っている。表現を変えればどんどん成長する建築、成長するシステムをもった建築、すなわちグローテクチャーとなる。

5, パリ通信へどうぞ

今月号は第89号です。

ノートルダム寺院の寄付の動きが分かります。

